

## 農林水産政策審議会 第2回企画部会 議事要旨

I 開催日時 令和4年7月7日(木) 10:00~12:00

II 場 所 兵庫県土地改良会館 6階会議室

### III 出席者

#### 1 委員

岩城 紀子 Smile Circle(株) 代表取締役  
大山 憲二 神戸大学大学院農学研究科 教授  
齋藤亜紀美 (株)池上農場 代表取締役  
辻村 英之 京都大学大学院農学研究科 教授  
中塚 雅也 神戸大学大学院農学研究科 教授  
長谷川尚史 京都大学フィールド科学教育研究センター 准教授  
藤原 建紀 京都大学 名誉教授  
船越 照平 (一社)兵庫県食品産業協会 会長  
松波 知宏 (株)ワールド・ワン 取締役  
山口 幹男 兵庫県農業経営士会 会長

#### 2 専門委員

原 智宏 (株)アグリヘルシーファーム 代表取締役

#### 3 県

岡農林水産部次長、守本農林水産部次長

ほか県農林水産部職員

### IV 議事次第

#### 1 開会

#### 2 議事

##### (1) 現地事例調査結果報告

「資料2」により説明

##### (2) 話題提供

「資料3」により説明

##### (3) 最近の情勢変化への対応

「資料4-1」、「資料4-2」により説明

〔 (1)~(3)に対する質疑および各委員から意見等は(別紙「主な意見」参照) 〕

#### 3 閉会

## 主な意見

### 「(1) 現地事例調査結果報告」に関する補足事項

#### ○委員

水産業分野と農業分野の現地調査に参加した。いずれも理想的な形での取組であり、また努力もされていることが印象的であった。

### 「(2) 話題提供」に関する質疑応答

#### ○委員

この度の現地調査で、生産者の方から販売面で県の力を借りたいという話も上がっていたが、販売面に力を入れている理由を教えてください。

#### ○委員

篠山は観光客が多く、父の時代から自分で売るという面で周りよりリードしていて、米を農協に10,000円を出していた時代に、12,000円で売っていた。周囲からは、そんな手間のかかることをするぐらいなら、作付面積を増やした方が良いといった声もあったが、今では周りも消費者に直接売のような流れになってきている。

集落営農をされている方とのお付き合いがあるが、組織を作ることばかりであり売することに意識がいかないように感じる。集落営農の顔が隠れてしまっているので、見えるようにして売ることが大事かと思う。また、作ることには一生懸命だが、肝心の商品にホコリがのっていたりすることある。従事者については、消費者へ直接届いているという緊張感を持ってもらうことが大事だと思う。

#### ○委員

小さな農協をイメージして流通の会社を立ち上げられたとのことだが、販売面のためか？

#### ○委員

元々丹波篠山や但馬はブランド力があつたが、兵庫県全体となると弱かつた。新しく立ち上げた会社の名前で県下の商品を販売できるようにしたかつた。また、会社を作ること、販売に関係するいろんな情報を仕入れるという狙いもあつた。

#### ○委員

農業生産を行っている会社の従業員の収入は上がってきているのか？

#### ○委員

昨年は、多い人で月4万、少ない人でも月1万上がっている。なるべく給料を払って、責任を感じてもらい、プロ意識を上げたいと思っている。

#### ○委員

仕入れ販売について、他社でも仕入れ販売されている方もいると思うが、差別化を図っているのか？

#### ○委員

当社としては、商工会の役割や観光協会にも所属しており、周りのお米屋さんとの意見交換も行いながら特別高いとか、安いとかにならないようにしている。いわゆる篤農家といわれる方から仕入れたものと、普通の農家で作った検査もしていないお米では、当然値段に差はある。

### 「(3) 最近の情勢変化への対応」に関する意見

#### ○委員

ウクライナ情勢もあり、資材や輸送費の高騰など農業経営への影響が大きい。食料安全保障については真剣に考えないといけない時がきている。米価も下がっており、米農家は大変。食料安全保障の観点からもある程度補助金等で支えることはやむを得ないと思うが、農家も努力をしなければならないと思う。

基幹的農業従事者のうち、65歳以上が80%以上を占める中、残りの20%の若い人にこれから頑張ってもらう必要があり、行政も重点的に支援するべきと考える。私も朝は時間がなくてパンを食べているが、米食を普及していくことも重要だと思う。

水産業については、網を入れるまでどれだけとれるかわからないというような漁法ではなく、養殖漁業をもっと進めるべきと思う。

#### ○委員

全国的に沿岸地域では、栄養塩不足が原因で漁獲量が減ってきている。日本海でも養殖漁業などで栄養塩不足による影響が出てきている。現地視察の資料にもノリの色落ちの事例があったが、栄養塩不足は、ノリの色落ちだけではなく、イカナゴ、タコ、二枚貝（アサリ、ハマグリ）など漁業生物全般に影響している。兵庫県は、全国に先駆けて瀬戸内海で栄養塩管理等により対策を講じてきたため、漁獲量の減少が小康状態となってきたが、伊勢湾の三重県側などは沿岸漁業が壊滅的な状況。このことから、兵庫県の取組は成功していると言える。

海域全体の対応は県で行っているが、干潟漁業については、漁協で対応している。兵庫県内では、発酵鶏糞を散布し、海を汚染することなく、美しい海と豊かな海の両立に向けた実験を播磨灘の北岸海域や淡路島で行っている。

また、カーボンニュートラルであるが、海に栄養塩を入れると一次生産が盛んになり、1か月程度で、難分解性の有機物が生成され、二酸化炭素固定に寄与することがはっきりしてきている。このことは、国際的には知られていたが、沿岸部における栄養塩と二酸化炭素固定の関係性を調べるため、県の環境研究所で調査を行っているところ。アマモなどにより吸収されるブルーカーボンが昨今注目されているが、このような植物プランクトンによる二酸化炭素固定の方が量としても多いと言われている。

#### ○委員

資材等が高騰する中、先ほどの話題提供でもあった通り、スマート化は、肥料や農薬の低減にも寄与するなど効果が多岐にわたることから、いかに進めていくかを考えることが重要である。

また、石油関係製品の値上げも予想される中、木質資源をどのように活用できるかというところまで、踏み込んで議論ができれば良いと思う。

現地調査の際、経営は大規模、小規模どちらが良いのか、新規参入をどのように支援するのか等について、現場で考えると難しいと感じた。どちらかという大規模の経営を理想としていると思うが、一般的に考えて、従来のやり方を変えるのは難しい。そのような中、社会的なインフラ（ハードだけでなく、情報の伝え方等を含む）をどうするのか？今回の先導的な取組においても民間がすべきなのか、県がすべきなのか、役割分担を掘り下げて考えていく必要があると感じた。また議論が拡散してしまうかもしれないが、ブランドデザインを描くことや関係者における合意形成も必要であると感じた。

事例発表に関してお伺いしたいことが2点ある。ひとつ目は、これまでのやり方を変え

る時に、障害があったと思うが、どう乗り越えてきたのか？どのように工夫されてきたのか？今後県内で他の人に広めるにあたっては、詳しく分析する必要があると思うのでお伺いしたい。

2つ目は、ベンチャー精神がどのように培われたかについて。子どものころから、ある程度経営的な感覚を養っていくことや、大人になって何かをはじめたい時に、どんな手順で、どこに相談しながら進めるのかなどをどのように子どもたち伝えていくかについて検討すべきだと考える。

#### ○委員

いろいろな人とつながり協力してやってきており、障害があっても苦にはなっていない。ある程度体力や資金力はいると思うが、とりあえずやってみようという気持ちと人が好きで、たまたま知り合いの異業種の方とつながれたことが良かったと思う。

異業種の方とのやりとりの中で、お店（飲食店等）に直接お米を持っていくという話をしたところ、「村八分にされないか？」と聞かれたことがある。農業のことが世間に全然知られていない（伝わっていない）ことやまだまだ手つかずの部分が多いということを感じた。農林水産ビジョン 2030 についても、誰に何を伝えるかを今一度よく考えて進めていく必要があると思う。

事務局の資料の中で、県民を巻き込もうとするとカーボンニュートラルかと思う。若い人は環境問題に関心が高く、兵庫県ではオーガニックビレッジを宣言している町村が4つあり、全国的に見ても有機農業に対する意識が非常に高いと言える。このようなことを内々で済ますのではなく、外向けに発信していけばよいと思う。以前、知り合いの酒造会社から日本酒にオーガニックの表示をして海外に輸出したいが、どのようにして酒米を集めたら良いかという相談を受けた。それを県として先導してやると生産者だけでなく、県民を巻き込むことになるのではないかと思う。

過疎化が進んでおり、自分たちより下の世代は人が少ないので、どうしても農地が余ってしまうと思う。昔であれば牛を飼うという話もあったが、木を植えると良いのではないかと思う。平地であれば、効率的に管理や伐採を行うことができる。いずれにせよ県民を巻き込んだ取り組みを進めていけたら良いと思う。

#### ○委員

飼料は、ほとんどが海外からの輸入であり入ってこなくなると作れなくなるものがある。

また、遺伝子組換のものが大半を占めている。一方で、食品業界では、遺伝子組換ではない飼料を使った畜産物に切り替えたいと考えていて、沖縄では牧草を飼料とする取組もされている。海外では、遺伝子組換の飼料が禁止されている中、日本も遺伝子組換の飼料を使わない体制がとれると良いと思う。

#### ○委員

情勢変化でいうと、飼料などの生産資材の高騰が問題となっているのは間違いない。肥育農家の買い控えにより日本全国で子牛の値段が安くなってきている。但馬牛は、その中でも比較的影響が少ない方ではあり、昔の1頭40万円程で売買されていた頃を知っている経営者はまだいいが最近畜産業に参入された方等の経営意欲への影響を心配している。そのような中、県の6月の補正予算が8億円。大きくは飼料の差額補てんと飼料生産に必要な機器の導入経費。機器導入の経費が1,500万円程度であり、大半が前者。緊急対策な

のである程度やむを得ないと思うが、長期的な視点に立ち経営の足腰を強くするような支援が必要だと思う。

資料4-1でも「県産物の増産」とあるが、今は、ほしい飼料が手に入らないということも生じてきている。本当の意味での県産品を目指すなら、県の方でも飼料の生産に関する支援が必要かなと思う。

「技術・資材」では、現地視察に行った弓削牧場では、地球環境に配慮した取組をされていたが、通常より手間がかかっており、製品にどのように付加価値をつけていくのかを検討する必要があると感じた。また、他の畜種への展開も含め、研究の余地があり、ビジョンを実現していくにはそのための支援も必要と感じた。

#### ○委員

肥料や資材が高騰、ピートモスも入ってこない。農業をしているのに海外のことを考えないといけない。国は、米から小麦や大豆への転換を進めている。来年は少し米を減らして小麦に転換しようと考えている。小規模な経営では、米で収益を得るのも難しい。今日の話提供でお話いただいた経営者が仲間になるのは心強い。農業スキルがないと仰っていたが、経営スキルがあり、農業スキルがある人を見つけ出してうまく対応されている。先進的な考えの方の意見を行政に伝えていくことも重要だと思う。

資材高騰対策は必要。特にお米は、ただでさえ米価が下がって大変なので、これ以上資材が高騰すると米をやめてしまう農家が増えてしまうと思う。

#### ○委員

流通消費についてお話しさせていただきたい。自社で青森のリンゴを取り扱っているが、それを可能にしたのが、青森県が年中出せるようにつくった貯蔵庫。同じように大掛かりなことをする必要はあるということではなくて、飲食店や小売店などの出口のニーズを探っていく必要があると思う。いろいろな県の方から生産者の方を紹介していただくことがあるが、ただ紹介するだけのところとこちらがどういうものを求めている生産者と一緒にとしたら売れるかまで考えてくれるところで差が出ると思う。最後までやることで成功事例にしても失敗事例にしても生産者と共有でき、他の生産者にも活かして横展開ができるようになるので、そのようなサポートを県としてやっていけたら良いと思う。

#### ○委員

資材が高騰しているが、他より2割程度安いので農薬を和歌山で買っている。農薬や肥料は県によって値段が違う。建設資材は、毎月調査したものが公表されているので、農薬や肥料についても調査して全国的に高い低いがないように基準ができれば良いと思う。

米価が下がって来ているが、お菓子など米粉の製品が流行っているので、県として率先して米粉消費につながるような取組ができれば良いと思う。

#### ○委員

資料4-2「関連する県内の先導的な取組」⑥の県民主体の具体的な取組(案)の地域支援型農業(CSA)のところ、「マーケットインの発想で」とあるがどういう意味か?「消費者の買いやすさ、参加しやすさを考慮する」というような意味だと思うが、表現を修正した方が良いと思う。「全県に拡大」については、本日、事例発表で紹介された取り組みもしっかり位置付けた上で、そのままの表現でよいと思う。

前回の企画部会では特に、国内の農畜水産物の価格が低いことについて話題になり、行

政の支援はいわゆる「小さな政府」の体制の中で限界があり、そのためいかに高付加価値化、差別化して高く販売し、それを消費者が価値として捉え、買い支えていくことが必要だという議論があった。しかし今回は、さらに資材や飼料の価格高騰という深刻な問題が加わり、本日の企画部会の中で、農業からの退出を余儀なくされる危機的な状況であるとの議論になった。

そのような中、参考資料1において様々な対策が検討されており、本日話題提供いただいた内容についても、規模拡大と多品目の栽培で費用を減らし、差別化された高価格販売でこの危機を乗り越える対策の1事例として、非常に参考になったと思う。

## ○委員

個別事項として、資料4-1に流通消費に記載の「米食中心の食生活への推進」というものはその通りであるが、難しいと感じている。日々学生を見ているとなかなか簡単ではないと思う。米食を進めるには、ただ方向性として定めるだけでなく、流通や調理や食べ方までおいしいご飯を届けることが大事である。食堂で生産者が気持ちを込めて“おいしいお米”が出てきたら学生も食べると思う。また、お茶碗で食べるだけでなく新しい食べ方も検討していく必要があると個人的には感じている。

全体としては、皆さんからのご意見にもあったが、循環型の社会を作っていくことは強調すべきだと思う。本来もっと早くに進めるべきだったと思うが、世界情勢が不安定の中でますます重要性が増している。海と山の水系の循環、農業と肥料の循環についても強調していくべきかと思うし、その延長線上で今日話題として出たオーガニックビレッジなどの有機農業や遺伝子組替作物への対応も議論していくことになると思う。

また、事例発表でカーボンニュートラルが大事という意見があり、衝撃を受けた。普通は、生産者の方は難しいと言われる方が多い。先進的な生産者の方がそのように考えていることは今後進めていく上で重要なことであり、県としても参考にしながらしっかり進めて行けたらと思う。

農林水産政策は、農林部局だけでは解決できない問題も含まれていると思う。特に、エネルギー問題は、地域の中でどのようにエネルギーを生み出していくかという問題に直結すると思うので、部局を超えてしまうかもしれないが、連携しながら議論いただきたいと思う。